
青い死神

青牙 ゆうひ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い死神

【Nコード】

N0599B

【作者名】

青牙 ゆうひ

【あらすじ】

レス・アースドと言われる世界。この世界には魔法を使う人々、つまり魔法使いが存在し、いろいろな場面で活躍していた。この話は「死神」とよばれた元魔法兵士の話…

罪の重さは量れない。

それは自分にしかわからない重み…

《ある森の奥地》

「兄貴、やっぱりやめましょうよ。「死神」に魂を食われますよ。」
「ばかやろう、死神なんていやしねえんだよ。ただの噂にきまつてんだろが。」

二人の男が森の中を歩いていた。兄貴と言われた男はがたいがよく、肩に大きな荷物を布にくるんでかついでいる。

「噂ごときでこの森の宝を逃すなんてもつたいないからな。それに、もし何か出たとしても、オレがこれで仕留めてやるよ。」
男がガツハツハと笑いながら言う。

「でも、宝自体あるかもわからないんでしょ？」
と、部下であるう小柄な男が言うと、

ザザザザ

「兄貴っ！今何か音がしませんでした？」

「いちいちビビってんじゃねえよ。だだの風の音…」

ガサッ

男が言い終わらない内に前の草むらから二メートルほどの大きな怪鳥がでてきた。

「兄貴ー！！」

「ガタガタ騒ぐんじゃねえよ。そのためのこれだろうが。」

そう言うと、男はかたから荷物を下ろし布にくるんであったものを出した。

それは大きな大砲で、小屋ぐらいなら一撃で破壊しそうなほどだ。

しかし、男がそれを構えた瞬間、バシッという音と共に、その武器はまるで木の枝のように吹き飛ばされてしまった。

気付くと、同じような怪鳥が5匹ほど、彼らを取り囲んでいた。

グエエエエ

一匹の鳴き声と共に全ての鳥が男達に襲い掛かってきた。

「「ギャー」」

頭を抱えて地面にかがみこんだ。
そのとき、

ヒュン

小さく風を切る音が聞こえたかと思うと、怪鳥の首が、ポトリと音を立てて落ち、首の無くなった胴体からは、血が吹き出している。

男たちがその光景にポカンとしていると。

「貴様ら、この森で何をしている。」

草村の中から一人の人物が現れた。

背は170センチほどで、黒いマントを着ている。顔は暗くてよく見えないが、二つの鋭い目が男達を見据えている。声から察するに男だろう。

「「ヒツ！死神〜！！」」

二人の男は、その男を見ると、一目散に逃げ出してしまった。

《翌日、町の酒場》

「だから昨日俺達は、見たんだって。あれは絶対死神だったぜ。」「
昨晚の男達が、店の店主と話をしている。」

「じゃあお客さんは死神に助けられたってのかい。」
「違うさ。結果的には助かったが、あれは俺達が屈んでたからだ。
あのまま立っていたら俺達まで首を切られて魂を食われてたに決ま
ってる。」

「あら、クラヴィ、あなたのことじゃないの？」
男達と離れた席で酒場の店員は一人の客に言った。

「さあな。」

話掛けられた男はそう言い、また酒をグイツとのんだ。

彼の名は、クラヴィ・ドルス。

青い髪にととのった顔立ち、目はするどく、耳には三日月型のピアスをしている。

「とぼけないでよ、死神さん。」

女性は悪戯っぽくいった。

「その名で呼ぶなと言っているだろう、エリー」

男はそう言うと、目を見開きエリーを睨みつけた。

「あら、恐い。」

しかしエリーは慣れていた。もう一年半もこの顔を見ているし、彼が本気でおこつてないのもわかつている。

「それにしても、いつまでこの町にいるつもりなの？」

「あなたが夜に森の散歩なんかしてるから、『あの森は死神がでる。』
つて噂がたつてるわよ。」

「いいんだよ。オレはオレの正体がばれなきゃいいんだ。

酒おかわり。」

クラヴィは頬杖をつきながらグラスを持ち上げた。

「はいはい。」

エリーはため息混じりにいうと、奥の方に酒を取りにいった。

クラヴィが辺りを見回すと他の客はほとんどいなかった。昨日の男たちは既に帰ったようだ。

「はいよ。いつものでいいんでしょう？」

あと、それ飲み終わったら隣町の間屋さんまで、おつかい行って来てね。」

「なんでオレが…」

「いつもタダ飲みしてるでしょ。今までの分の料金払ってくれるんじゃないけど？」

クラヴィが反論を言い終わる前にエリーが『明細書』と書かれた紙をピラピラさせた。

「チッ」

そう言うとクラヴィは席を立った。

「いつてらっしゃい。」

バイクは店の裏に停めてるから。」

《2時間後》

今クラヴィは隣町の間屋で酒を購入し、エリーのいる酒場に向かっている。

そして町に入るための橋に差し掛かったとき。

バアン バアン

二つの銃声が町中に響き渡った。
煙もモクモクと立ち上っている。
方角から察するに酒場の方だ。

クラヴィイは嫌な予感がしたのでバイクのスピードを速め、急いで酒場に向かった。

《酒場の前》

「お前ら、おとなしく金目の物を渡しな。この家みたいになりたく
なかつたらなあ。
ハツハツハー」

そこには、いかにも盗賊らしい男達が十数人、武器をもつてたつて
いる。

そしてその男達の足元には、銃で撃たれたらしく、一人の男が血を
流して倒れている。

息はまだあるようだが、このままでは死んでしまうだろう。
人々がどうしようもなく立ち尽くしていると、

バァン

またもや銃声がした。

しかし、今度は盗賊ではなく、町の警察隊による発砲だった。

銃弾は見事にボスである男の額に向かっていく。
しかし、

ガァン

銃弾は、男の額に当たると、ポトリという音と共に、男の足元の撃たれた男性の横に落ちた。

男は銃弾を放った警察をギロリとにらむと、

「いてえなあ。そんなにしにてえなら全員死ぬか？」
額には黒い焦げあとしか残っていない。

「ひいいい！化け物だあ！！」

数人の人々はそれを見て、呆然としていた。

「オレの顔に傷を作りやがったな？」

「よし、おまえらあ、やっちまえー！。このまちの全てのものをぶっ壊せー」

男の合図と共に盗賊達は、家に火を着けたり、銃を人々にむかって乱射したりし始めた。

しかし、突然

ピキイーン

暴れていた男達は、突然凍りついてしまった。

「てめえら盗賊か。」

するとどこからか、聞いただけでも凍りつきそうな冷たい声が出た。

気がつくのと、ボスの後ろに、クラヴィが立っていた。

しかし、いつもどこかちがっていて、見ているだけでも恐ろしいほどだ。

「貴様、誰だ!!」

ボスは振り向くとクラヴィに向かって銃を構えた。

「てめえなんざに名前なんて言いたかねえよ。」

そういうと、クラヴィの手から凍りの棒が出現し、耳に着いた三日月型のピアスが外れ、たかと思うと一瞬で巨大な氷の刃物となり、クラヴィのもった棒の先に着いた。

まるで大きな鎌のような形だ。

「思い出したぞ。お前は元魔法兵士の三番隊長、クラヴィ・ドミスだな？」

その大鎌で何人も敵を地獄に落とし、『死神』の異名で恐れられていたなあ。だが仲間殺しの罪で死刑判決をうけ、逃げ出したんだっけ？」

クラヴィは、何も答えず、その大鎌の峰でボスの腹に一撃をいれた。

ガァン

「!!」しかしさっきの銃弾の様に男には当たったが効いてはいないようだ。

「ハッハッハ」

残念ながらオレも魔法を使えるのさ。

能力は『硬質化』。大砲も効かねえぜ。

もちろんその鎌もなあ。」

「そうか。

ならお前、『魔道具』ってしってるか？」

「ああ知ってるとも。」

魔法を使えない下等種族どもが作った。魔力を纏った武器だろう？」

「そう、魔道具は魔力を持たない人間が使う武器。そして、この鎌も魔道具の一つ。」

なぜ、魔力をもったオレが使っているかわかるか？」

「しらねえなあ！」

ボスはそう言うと銃の引き金をひいた。

しかしボスの目の前にクラヴィの姿は無く、流れ弾は氷づけになった仲間に直撃した。

「魔道具は、魔法使いが使うと、何十倍の威力になるんだよ。」

ボスは気がつくと後ろにクラヴィが立っていた。

だが気付くのが遅すぎ、次の瞬間には、クラヴィの鎌は、ボスの腹部に深々と刺さっていた。

辺りはしばらく沈黙に包まれ、盗賊の死体を見た人が叫び声をあげたり、クラヴィのことをヒソヒソと話す声が聞こえはじめた。

「あの『死神』だって。」

「仲間殺しの？」

「近付かないほうがいいよ。殺される。」

クラヴィの足元には、すでに息絶えた盗賊のボスの亡骸が転がっていた。

クラヴィはしばらくそこに立ち尽くし、氷の鎌をもとのピアスに戻すと、町の入口の方に歩き出した。

「クラヴィ!!!」

するとエリーの声がして、クラヴィは足を止めた。エリーが駆け寄ると、クラヴィの顔にはさっきの恐ろしさのカケラもなく、心なしか少し悲しそうに見えた。

「どこ行くの!?!」

「正体を知られちゃったんだ。もうここにはいれねえ。」

「なんで？」

町の人達を助けたんでしょ？」

エリーは涙ぐみながら言った。

「人殺しは人殺しだ。」

それにオレは罪人だ。」

そういうと、クラヴィは振り向くこともせず、また入口に向かって歩き出した。

「クラヴィ!!!」

エリーがまた叫ぶが、もうクラヴィは立ち止まらなかった。

「また…、うちの店にきてね。」

いつものお酒…、用意して、待ってるから。」

エリーは泣きながらそう叫んだ。

しかしクラヴィは振り向く事もせず。そのまま、どこかへと消えて

いった。

人はみな罪という重りを背負って生きている。

人殺しと言うのは、どれぐらいの罪なのだろう？

おれには想像できないが、この重みを背負って生きていく。

なぜならオレは人を殺したから…

たとえ本意でなくても…

(後書き)

「青い死神」を呼んでくださって、ありがとうございました。 m)
| . m 誤字・脱字などがあれば、教えて下さい。

あと、良かった所、悪かった所など、アドバイスを貰えると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0599b/>

青い死神

2010年11月10日03時04分発行